さくらんぼがり　9

さくらんぼがり　9

EntsCat

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=20052335

モ腐サイコ100, 霊幻総受け, もぶお兄さん×霊幻

師匠総受けです。とある悪癖のある師匠です。今回は本番ありません。もぶお兄さん×師匠を含みます。良ければどうぞお付き合いください。倫理がアレです。

いつもいいねやブクマ、絵文字やコメントなどありがとうございます！とても励みになっています🌸
マシュマロもありがとうございます〜！https://marshmallow-qa.com/entscat?utm_medium=url_text and utm_source=promotion

さくらんぼがり　9

霊幻の机の前に、鈴木統一郎が腕組みをして立っている。
かれこれもう２時間だ。
「……あの〜、何かご用でしょうか……」
根負けして霊幻がおそるおそる声をかけた。
「……将の童貞を喰ったそうだな？」
律とオセロをしていた将が思いっきりお茶を噴き出した。
「なっっっっっっに言ってんだよクソ親父！！！！！」
「童貞を喰い散らかした責任を取って貰いたい」
「マジで黙ってくんねぇかなぁ！？！？！？！？親とシモの話すんのマジで地獄なんですけど！！！！！」
「……本当に申し訳ございません」
「霊幻さんも！！！！親父に謝んなくていーから！！！！」
「ショウくん」
霊幻は凪いだ目で将を見つめる。
「お父さんの言う事はごもっともだ。ショウくんを心配してのことなんだよ」
「ぐっ……」
将は言い返せず椅子に取り敢えず座り直す。
「うむ。その通りだな」
「本当に申し訳ありません」
「いや謝罪はいい。何故将と付き合わん？」
「……はい？」
「将に不満があるとは言わせんぞ、肉体関係まで持っておいて。今すぐ将と付き合え。返事は『はい』か『イエス』だ」
咄嗟に統一郎をブン殴ろうとした将を律と花沢が取り押さえる。
「親通して交際を迫るとか……最悪すぎる……マジ今すぐどっか行ってくんねぇかなあのクソ親父……」
「か、可哀想すぎる……」
ブツブツと床を睨みながら呪詛を吐き始めた将を見て、他人事ながら律が頬を引き攣らせた。

「……私はご子息にはふさわしくありません。男ですし、」
「見れば分かる」
「年も離れておりますし、」
「それだけ元気なら問題なかろう」
「……交際人数も３桁超えてますし」
「それがどうした」
ふん、と統一郎は鼻で笑う。
「お前は将の人を見る目を馬鹿にするのか」
「……いえ決してそんなことは」
「お前がこれまでに誰を愛そうがどれだけ汚れていようがどうでもいい。重要なのはこれからだろう？最後はただ将の隣りに居ればそれで良い」
なんかどっかで聞いたことありますね、最近収容施設に漫画の差し入れあったから、と後ろでヒソヒソと芹沢とヨシフが話している。
「……分かりました。前向きに検討させて貰います」
「うむ」
にこ、と霊幻が精一杯の営業スマイルを浮かべている横で、
『えっ』と茂夫が立ち上がった。
「親連れて来たら交際を前向きに検討してくれるんですか！？なら僕だって両親連れて来ますけど！！」
「いやモブくんホントにやめてね？」
「俺だってかーちゃん連れて来ます！！」
「芹沢もやめろよ本当に」
「じゃあ僕も両親海外から連れて来ようかな」
「テルくん完全に楽しんでるな！？」
ぎゃいぎゃいと騒ぎ出した相談所を、複雑な顔をして統一郎は眺めていた。

※

「えーでは、第八回霊幻新隆被害者の会を開催します」
「いやちょっと待て」
エクボが緑の手をビシッと上げる。

「なんであの男がここに居るんだよ」
「……む」
ドリンクメニューを将と見ていた統一郎が顔を上げる。
「１人息子を誑かされた私が被害者じゃないとしたら誰が被害者なんだ？」
「ぶふっ！」
大真面目に言い切った統一郎に、耐え切れない、とばかりに俯いたヨシフが吹き出す。
「wwww爪の元ボスが、息子の童貞喰った責任取れってビッチに交際迫るの、めっっっっっっちゃくちゃ面白くて噴き出さないのに必死だったわwwww」
ロックグラスを指で持ったヨシフが顔を伏せたままくつくつと笑い続ける。
「警察の飲み会で滑らないネタありがとうよwww一生こすらせてもらうわwww」
笑い続けるヨシフに統一郎はにわかに青くなる。
「……将、もしかして私はとんでもないことをしてしまったのか……？」
「いまさら気付いたか、馬鹿親父。……まあ別に俺は気にしてねーからいーよ。でも２度とすんな」
「……この店で１番強い酒をくれ」
ずーん、と統一郎はダメージを受けた。
「おー、ならスピリタス頼んでやるわww」
「ヨシフさん酔いすぎですよ！あーもういつの間にか４杯もウィスキー飲んで……」
茂夫が顔をしかめた。
「……芹沢、お前のおすすめは何だ」
「ふぁっ！？え、えーと、強い酒……ってなると、日本酒……とかですかね……！？」
「おいオッサン下戸に聞くなよ。この中ならジンとかテキーラじゃねぇのか？」
見かねたエクボが助け舟を出した。
「ふむ……」

「スピリタスいこうぜww飲めなかったら俺が飲むからww」
「ザルの言うことも聞くなよ、そいつ酔ってるフリしてめちゃくちゃシラフだからな。前に芹沢が飲み過ぎで倒れた時めちゃくちゃ冷静だったから」
統一郎はジロっとヨシフを睨むが、陽気な酔っぱらいはくつくつと笑うばかりだ。
「……じゃあ、テキーラを」
「親父本当に大丈夫か？かあちゃんとワインぐらいしか飲んでるの見たことないけど、強い酒飲んで救急車とか恥ずかしいからやめてくれよ？」
しばし統一郎は眉を寄せて悩む。
「…………ワインを」
これ以上恥を晒さない方を選んだらしい。
「おー、じゃあウィスキーのロックと、アイスミルク、アイスティーにアイスコーヒーにウーロン茶、ワインのデキャンタでいいな？」
「ワインはグラスでいいグラスで！！」
「デキャンタとあんま値段変わんねーんだよ。いいよ俺が飲むから」
「鈴木さん気を付けてくださいね、ヨシフさん余った酒飲んでくれますけど、代金はしっかり本人に払わせますからね」
「うるせー俺は薄給の公務員なんだよ。霊幻とすら割り勘でしか飲んだことねーんだからな！」
「えっそれって霊幻さんに甲斐性を見せたかったけどできなかったってことですか？」
「このスペシャルサンデーとやらを追加で頼む」
混沌としてきたカラオケボックスに統一郎は頭が痛くなってきた。
「そういや親父、なんで俺と霊幻さんがヤったの分かったんだ？」
「母さんに相談してただろう？『本気で好きな人ができたかも』って霊幻新隆のことを」
「は！？あの時間アンタ収容所に戻ってたよな！？なんで知ってるんだよ！！」
「気になったから超能力で見ていた」

「キッッッッショ！！！２度とすんな！！！」
「社長千里眼使えるんですね、凄いなぁ」
「……てことは、今師匠が何してるか見れるんですか……？」
全員の視線が統一郎に集まる。
「……よほど親しくないとちゃんとピントが合わないんだが……霊幻新隆の写真とかあるか？」
「「「あります」」」
茂夫、芹沢、花沢が同時にスマホを取り出す。
「……この中でベストショットを決めるんですね！？」
「いや顔が分かればそれで」
「チキチキ！第一回師匠のベストショット決定戦！」
「……」
統一郎はワインを傾けた。
「僕はこれです！犬とたわむれる師匠！」
「俺は……出張の帰りにたまたまやってた祭りでチョコバナナ買って頬張ってる霊幻さん」
「僕のはあくびしてる霊幻さん……なんですけど、なんか芹沢さんのだけいかがわしくありません？」
「えっそう？」
「他の写真も見せてくださいよ……うわ、ソフトクリーム舐めてるやつとか、フランクフルト食べてるやつとかだ……」
「ち、違うよ！？モノ食べてる霊幻さん可愛いなぁって思って！」
「じゃあこの呪術クラッシュの後の顔を赤くして胸元を緩めてる師匠の写真は何で撮ったんですか」
「……」
「いや、ていうかお前らのコレ全部隠し撮りじゃねえか。ヤバさはあんまり変わんねえだろ」
エクボのツッコミに３人はナナメを見た。
「だって師匠カメラ向けてるの分かったら営業の顔になるから……エクボ、今回の優勝決めてよ」
「……そうだなぁ、シゲオのやつじゃねえか？あいつの無邪気な笑顔なんてかなりレアだからな」
「よしッ」

「流石だね影山くん……！！」
「うわーこれ意外と悔しいなぁ……新作でリベンジしたい」
「あ、あの、隠し撮りって多分犯罪ですから、その……しない方が……」
おずおずと律が注意する。
「えっそうなの？残念だなあ」
全員の視線がヨシフに集まる。
「……あ？何か話してたか？」
ウィスキーを手にヨシフがしらっと言った。
「軽犯罪で超能力者しょっ引くのはかなり面倒だからな。したくないんだろ。……じゃあその写真貸してくれ」
統一郎は茂夫のスマホを受け取り、トンと写真の顔に指を落とした。
「ちょっと時間がかかる。黙っててくれ」
茂夫に憑依した最上がカチャカチャとパフェを食べる音だけが響く。
「ん……見えたぞ。ちょっと古めのアパートの２階の角部屋で合ってるか？」
「そこですね。何度か飲み会帰りに送ったことあります」
「やはりピントが合いづらいな……音までは聞こえそうにない。……ああ、見えた見えた。スーツのままパソコンで何かしているな」
「今日は男漁り行かないのかな」
「どうだろうな……ん、立ち上がって、スーツを脱ぎ始めたな。上着を脱いでハンガーに掛けて、ネクタイを抜いて……ベルトを外して」
「わーっ！！親父、そこまでで！！」
「ありがとうございますもう大丈夫です！！スーツ脱いでるならもう今日は出かけないと思うんで！！」
慌てて止めた将に茂夫が続く。
「ん、そうか」
す、と統一郎は写真から手を離した。
「……一応言っておくが窃視も犯罪だからな。今回は色々複雑でめ

んどくさいから不問にするが」
煙草に火を付けながらヨシフが言う。
「……で？霊幻が男漁りに出かけようとしてたらどうするつもりだったんだ？」
ぐるりと能力者たちの顔をヨシフは見回す。
「そりゃあ、止めに行きますよ」
「……まあ好きにすりゃあいいとは思うが、それこれから毎晩やんのか？言っておくが鈴木は近々引き上げるぞ。コイツの戦力待ちの案件結構あるからな。お前ら毎晩交代で霊幻を見張りでもすんのか？」
「それは……」
茂夫が口ごもる。
ふう、とヨシフが煙を吐き出した。
「……あいつのトラウマの原因でも探ってみるか」
「「「「トラウマ！？」」」」
茂夫、芹沢、花沢、律が驚いて聞き返した。
「どう考えてもトラウマ持ちだろ、あいつ。過呼吸にEDに、セックス依存症……なんか原因に心当たりねぇか？」
「……元カレ、とかですかね？」
うーん、と悩みながら芹沢が言う。
「ずっと引っかかってたんです。俺が交際を迫った時に、霊幻さんは『もう俺、そういうのはいいんだ』って言ってたんです。もう、ってことは昔に付き合ってた人がいるってことですよね？」
「元カレか……」
「うーん、聞いたことないですね……僕に黙ってたのなら探りようが無いですけど」
茂夫が眉を寄せる。
「確か結構休日も会ってたんだろ？不特定の相手ならともかく、恋人がいたなら隠しようが無いと思う。だとしたら、影山茂夫に出会う前か……」
「……トラウマか」
ずるりと茂夫の身体から抜け出て最上が呟く。
「なんか心当たりあんのか？」

「気にはなっていた。新隆くんの記憶に、壊れていたものが有ったのだ。記憶を壊す、というのはよっぽどの事だ。戦争や災害に遭ったり……犯罪に巻き込まれて悲惨なモノを経験したり、それレベルでないと記憶は壊れない。あんな平凡な記憶が、どうして壊れていたのか……気にはなるさ」
「……どんな記憶だった？」
ヨシフが続きを促す。
「何処かの会社の中のようだった。新隆くんは段ボールを持って歩いていて……男が話しかけて来たのだが、男の顔は真っ黒に塗り潰されていた。今思えば、随分と馴れ馴れしかったとも思う。アレが昔の恋人じゃないかね？」
「師匠は相談所立ち上げる前には会社勤めをしてた、って聞いてます」
「ふんふん、それで一回調べてみるか」
ヨシフはスマホを取り出して電話し始めた。
「……うんそう、霊幻新隆と交際してたと思わしき男……あーそうだな、元同僚にもあたってみてくれ。……うん、うん、いや優先度は低くていい……え！？……分かった。頼む」
ヨシフは電話を切ってスマホで検索を始める。
「……あいつが炎上した時に、匿名掲示板であいつの元カレだって言う奴が書き込んでたらしくてな」
検索結果の画面を茂夫達に見せた。
「『ソルトスプラッシュwの元カレだけど質問ある？』……釣りだ釣りだって騒がれてますね」
「あ、証拠見せろって言われて写真アップしてる……駄目だリンク切れで見れないや」
「でもその後の書き込みで『少なくとも友達っぽい？』って書かれてるんで、ツーショットの写真か何か上げてたっぽいです」
「なんかムカムカしてくんな……元恋人のことバラして楽しんでるの性格悪すぎだろ」
「……僕はこの人なんか怖いな。だって少なくとも師匠との写真をずっと持ってたってことでしょ？」
「あ、突然書き込み途切れてる。なんでだろ」

「流れが下ネタになってて……元カレ？の人が『新隆とまたやりてー』って書き込んだのが最後か……」
「原因コレじゃない？その後に『分かる、ソルスプめっちゃ名器だよな。喘ぎ声可愛いしマジ最高。今カレで〜すwww』って書き込んでる人がいて……これにショックを受けたんじゃないかな」
「えええ心弱っ」
「分からないけど……僕もなんとなくそんな気がする……」
「本物かどうかは分からんが、そいつの居場所ならすぐ突き止められる。聞き込みしてくるわ」
立ち上がったヨシフにぞろぞろとみんな付いてくる。
「……いや多い！！９人は多い！！少なくとも未成年はついて来んな！！夜遅いから帰れ！！あと鈴木も収容所戻れ！！時間だ！！」
「「「「ちっ」」」」
そうして茂夫と芹沢と花沢、エクボと最上がヨシフについて行った。

※

ファミリー用のマンションの一室にヨシフ達は向かっていく。
「あ、夜分にすみません。警察です。少しお話よろしいですか」
ヨシフが営業スマイルを浮かべて手帳をカメラに映す。
『……どうぞ』
一行はマンションの中に招かれた。
「なんの御用ですか」
どこか憂いを帯びた男性は、身長が高く、キリリとした顔をしていた。
玄関には伏せられた写真立てとペアリングが置かれていて、目を引いた。
「恋人がいらっしゃるのですか？それとも奥様？」
はっとした男性はペアリングを掴んでポケットに隠す。
「恋人はいません。これはただのインテリアです。……コーヒー入れますね」
キッチンで男性がコーヒーをパックから移して、出して来た。

「グラスがバラバラですみません」
「いえいえ、お構いなく。……あの、霊幻新隆さんってご存知ですか？」
男性はあからさまに動揺した。
「あの、新隆に何かあったんですか？」
「いえいえ、そういう訳ではないのですが……あなたは霊幻さんの元恋人、と言う事でよろしいですか？」
「……そうですね」
「よろしければ、霊幻さんについて教えて頂いても？」
「……付き合ったのはたった半年なので、大したことは知りません。新隆は俺の職場の後輩で……気が合って付き合って、でも些細なすれ違いで喧嘩になって、別れた。それだけですよ」
コーヒーに手を伸ばそうとした男性の頭がかくんと落ちた。
「……まどろっこしい。直接見てくる」
最上が男性に手をかざしていた。
そのまましゅるんと男性の中に入る。
しばらくして。
「……まあ、この男がトラウマの原因で間違いないだろうな」
と不快そうに言いながら、最上が出てきた。
「別れる時にめちゃくちゃ言ってるぞ、この男」
「最上、詳しく教えて貰えるか？」
「ん、そうだな……まず、付き合うきっかけだが、かなりグレーだ。好みの顔とスタイルをしていた新隆くんに目を付けていたこの男は、歓迎会で酒に弱い新隆くんを酔わせて自分の部屋に連れ込んだ。意識のない新隆くんに手を出して、身体の価値に気が付いたこの男は、翌朝謝り倒して『前から好きだった』と嘘をついて、交際を押し切った」
「師匠昔から押しに弱いんだな……」
「始まりはそんな感じだが、２人の交際は順調だった。早々と同棲もして、この男は幸せだった。……いや、この男にとって、幸せだったのはその半年間だけだった」
「……何があったんですか？」
「新隆くんが仕事で評価されるようになった。先輩だったこの男よ

り、営業成績が上回り、資格試験にも先に合格した。その頃からこの男の新隆くんへの当たりは強くなった。醜い男の嫉妬だな」
「まあ、あるあるっちゃあるあるだな」
「新隆くんの成長を妬んだ他の社員の流した『枕営業してるんじゃないか』って噂話の真偽を本人に問いただしたのが決定的だったな。この男は新隆くんが枕営業をしているという前提でなじった」
「うわあ……ひどいね」
「『俺だけじゃ満足できないなら言えよなこの淫乱、友達呼んでマワしてやったのに』とか、『処女じゃねーお前にネコとしての価値なんかねーんだよ便器に成り下がりやがって』とか聞くに耐えない罵詈雑言を新隆くんにさんざん言い放ったあげく、『もう別れよう』とこの男から言ったんだ。……そしてそれを今も後悔している」
「後悔だぁ？」
「この男は『別れたくない』って新隆くんからすがられることを期待してたんだ。だが新隆くんはペアリングをこの男に返して、私物をまとめてこの部屋から出て行こうとした。この男は焦って『割り切りが良すぎんだろ、やっぱり他に男がいるんだな？』って言って腕を掴んだ。そしたら新隆くんは……」
最上は少し顔を伏せる。
「くしゃっと泣いて……『愛してる』とこの男に言って……そして出て行った。この部屋に置き去りにされて、この男はやっと取り返しの付かない事をしたのだと理解した。それから会社で会う度に復縁の機会を探っていたが、新隆くんは転職してしまい、電話番号も変わって連絡が取れなくなった……」
「とことん自分勝手だな、こいつ」
呆れたようにエクボが男のそばに飛んでいく。
「よし、いっちょ恐慌状態にでもして、霊幻に土下座でもさせっか！」
「やめなよ、エクボ」
静かに茂夫がエクボを止めた。
「話を聞きながらずっと考えてたんだけど、確かにこの人が師匠のトラウマの原因かも知れないけど、それを引っ張り出して師匠に突

き付けて、さあトラウマを乗り越えろってやるのは、違うんじゃないかなって思うんだ」
「はぁ？」
「師匠は僕と出会った時、全然暗さとか無かった。キラキラした目でずっと僕を見守ってくれた。……師匠はさ、全部忘れることにして、記憶を壊してまで、……多分この人を赦して、前に進む事を選んだんだ。そんな師匠は魅力的だったし……そうやって前を向いてきた師匠を、そうとは知らなかったけど、僕は好きになったんだ」
茂夫は自信無さげに手元を見る。
「その……『トラウマを乗り越えて男遊びしないようになれ』っていうのは、僕たちのわがままなんじゃないかな、って」
「……まあ、そうだな。俺もそう思う。それにだ、トラウマの原因を突き付けて解消してやったらスッキリ解決、なんてのはレアケースだ。むしろ余計な事を思い出して悪化する事も多い。……今、あいつは法に触れる事も無く上手くやってる。そっとしておいた方がいいかも知れないな」
ヨシフの言葉に不満げにエクボは顔をしかめる。
「じゃあここまで何しに来たんだよ」
「一応調査しに、だよ。原因を知ってるのと知らないのでは大違いだからな。今後の対処も変わってくる。……おい、帰るからその男を起こしてくれ。戸締りさせねえと」
最上が手をかざすと、男ははっと目覚めた。
「ご協力ありがとうございました。大丈夫ですか？」
「す、すみません、うたた寝してしまったようで……」
男は玄関までヨシフたちを見送る。
「あの！」
「はい？」
男の呼びかけにヨシフは営業スマイルを浮かべて振り返る。
「……その、新隆は俺のこと、何か言ってましたか」
ニッコリとヨシフは笑みを深める。
「いいえ、何も」
「……そうですか」
男は肩を落とす。

ヨシフはマンションを出た後も、しばらく営業スマイルをしていた。

※

「なんかお前ら大人しくない？」
「え、えっ！？そうですか？」
皆、霊幻が悲恋の末に傷付いてああなったのだと思うと、ちょっかいをかける気にならなかった。
「セクハラもしてこねーし静かだし……ま、その方がいいけど。あーそれより、近々シフト制にしようと思うんだよ。正直今は戦力過多だからな」
手書きのシフト表を霊幻はノーパソを閉じてデスクの上に広げた。
「え、ヨシフさんと師匠２人きりの時多くないですか？」
「ヨシフどうせずっと俺を見張ってるし、給料払わなくていいから頑張ってもらおうかなって」
「最上が普通にシフト入ってるの面白いんだが」
「エクボもでしょ」
「お、俺様は元々ここの所属だから……」
「ふむ、労働の対価には何を貰えるのかね？」
「ああ、考えたんだが、エクボと最上さんにはスタンプカードをあげようかと」
「「スタンプカード？」」
ゴソゴソと霊幻は『エクボ』と『最上啓示』と書かれたスタンプカードを出してくる。
「１時間スタンプ１個な。３０個貯まったら何でも言う事きいてやるよ」
「「今なんでもって言った！？！？」」
「いや、常識と５０００円の範囲内でな？」
プルプルと最上が震える。
「……っ新隆くんにセーラー服を着て貰うのはアリかね！？！？」
「え！？うーん……まあそれぐらいなら……」

「スカートをめくるのは！？！？」
「それはアウト」
「じゃあ新隆くん自身にスカートをちょっと持ち上げて貰うのはどうかね！？！？」
「うーん……まあいいかな」
「よっし！」
「えっそれOKなんですか！？だったら僕もスタンプカード欲しいです！」
我も我もと従業員が名乗りを上げる。
結局全員にスタンプカードを発行することで落ち着いた頃。

コンコン、と扉がノックされた。

「はい、どうぞ〜」
霊幻が営業スマイルを浮かべて声をかける。
「新隆っ……！」
茂夫が、エクボが、芹沢が、花沢が、最上が、ヨシフが同時に息を呑む。
元カレが、乗り込んできた。
「新隆っ、俺が悪かった……！！頼む、俺とやり直してくれ！！ずっとお前の事が忘れられなかった……！！」
茂夫たちは不安になって霊幻の顔を見つめる。
この男は、霊幻が心から愛していた男だ。もしかすると、うんと言ってしまうのでは？と。
「……あの、人違いをなさっているようですが……」
だが、霊幻は困ったように眉を下げただけだった。
「どこかでお会いしましたっけ？」
──記憶が壊れるとはこう言う事なのだ、と茂夫は実感して戦慄する。
もはや、霊幻は元恋人のことを思い出すことができないのだ。
「何とぼけてるんだよ！ほらっ、お前が置いていった指輪も、まだ取ってあるんだよ！」
ずい、と差し出された指輪を、しげしげと霊幻は見つめる。

「綺麗な指輪ですね！これからプロポーズでもされるのですか？頑張ってくださいね！」
完全な営業スマイルを向けられて、元カレの顔がだんだん青くなる。
「あ……あ……」
よろよろと後退り、足早に相談所を出て行った。
「あっ、またいつでもどうぞー！」
霊幻がお決まりの文句をその背中にかけていた。

※

「けっっっっさくだったな！！見たかあの元カレの顔！？あースカッとしたー」
ヨシフがウィスキーのグラス片手にニヤニヤしている。
「うむ。溜飲が下がったな」
ずっと霊幻の後ろで手をかざして警戒していた最上が満足そうにフードメニューを眺めていた。
「……僕はあんまり笑えないです。もし僕があんな風に師匠に忘れられたら、僕はどうなるかちょっと予想がつかないです」
アイスミルクをちょっと啜って、茂夫は続ける。
「あの人、謝らせても貰えなかった」
苦しそうに茂夫は大事に持ち歩いているガラケーを取り出した。
「師匠から完全に忘れられるなんて……それ以上の罰は、僕は思いつかないです」
芹沢が少しだけ冷や汗をかいた。
「……あの人は霊幻さんが恋人として側にいてくれて、色んな初めてを貰っていて、それを当たり前に思っていた人なんだ。……僕は正直ざまあみろと思ったよ」
花沢がロングアイランド・アイスティーを吸いながらポツリとつぶやく。
「……まあ、あの男程度でいいなら将の勝ちだな」
「親父黙ってて」
「そうだ鈴木、霊幻の元カレ今どうしてるか千里眼で見てみてくれ

ないか？ベッコベコに凹んでるか知りたいwww」
「ヨシフさん、趣味悪いですよ！！」
「俺様がちょっと見てきてやろうか？」
「エクボまで！！」
「なら私が」
「最上さん乗らなくていいから！！ほら今日のフードメニュー決まったんですか！？」
「……社長、千里眼のコツとか教えて貰ってもいいですか」
「芹沢さんまで！？」
「あ、いや俺はタイミングが悪かったかな……ずっと思ってはいたんだよね、もっと色々できるようになりたいなぁって。最上さん、お札の作り方教えて貰いたいんですけど……」
「千里眼のコツはだな、」「……ああいうのはだね、」
統一郎と最上が同時に話し始めてしまい、無言で譲り合う攻防が続く。
「えっと、すみません、じゃあ社長から」
「……千里眼のコツは、念写だ。頭の中のイメージにピントを合わせることから始める。次に頭の中から少しずつピントを外にずらしていって、他人にピントを合わせるんだ」
「え、それって一部幽体離脱してません？ろくろっ首みたいな」
「……そうかもしれんな」
なるほど、と芹沢は頷く。
「それで、最上さん、お札なんですけど」
「……ああいうのはだね、年月と修行がいる。一朝一夕では作れるようにはならんよ。それでもやりたいというなら止めはせんが」
「うっ……考えておきます」
悩む芹沢の向こうで、花沢がじーっと最上を見ている。
「……何かな？」
「……いや、最上さんって親切というか何と言うか……お人好しですよね？悪霊なのに」
「……そんなことは無い」
「なんか心配だなあって。そんなに尽くすタイプなら、好きになったのが霊幻さんで良かったですね。悪い人に利用されないよう気を

つけなきゃ駄目ですよ」
「……」
「ぶっくく、コイツはな……」
何か言おうとしたエクボをひょいパクと最上が口に含む。
「あーっそんなもの食べちゃ駄目ですよ最上さん！！ほらアイスの天ぷら来ましたから！！」
茂夫が慌ててエクボを救出した。
「霊素が……霊素がごっそり減った……」
よろよろとエクボが茂夫の後ろに隠れる。
「余計な事を言おうとするからだ」
最上はしゅるりと茂夫に憑依してアイスの天ぷらをかじる。
「！！ほう、これは……新感覚……！！」
「良かったですね」
横で見ていた律がくすりと笑った。
「……さて、これからどうするかだなあ」
カラン、とロックグラスを鳴らしながらヨシフが呟く。
「あいつのセフレにでも聞いてみるか？」
「……えっ！？師匠セフレいるんですか！？」
「なんだお前ら知らなかったのか？アイツ童貞喰った後迫られて折れて何人かセフレいるぞ」
「知らなかったです……童貞としか寝ないとばかり思い込んでて……それならいっそセフレでも……」
「いやいやいや待て待てシゲオ、本当にいいのか！？それでいいのか！？！？」
うーん、と若人たちは夜半過ぎまで悩んだ。

※

「師匠」「「霊幻」」「「「「霊幻さん」」」」」
ざ、といつものメンツが霊幻のデスクを取り囲む。
「な、何……？」
「師匠、僕たち師匠に交際を申し込みに来ました」
「え゛っ」

「師匠僕たちのこと好きだって言いましたよね？だったらこの中から１人選んで欲しいです」
「それはその……あー……」
霊幻は少し考え込む。
（将来に影響が無くて……実力的にトップクラスで物言いが入りづらいと言ったら……）
「じ、じゃあもが」
「あ、もし１人選ぶなら僕たち全員が納得する理由を言ってくださいね。納得出来なければ今ここで決闘を始めます」
霊幻は座り直した。
冷や汗を流しながらもう一回考える。
「え、選べない、かなー☆だってみんな好きだもんっ☆」
霊幻は精一杯の媚び顔を作った。
はあ、とヨシフあたりが呆れたため息をついた。
「……まあそんなこったろうと思ったよ」
「じゃあ師匠、僕たち全員セフレでいいですよ」
「せ、セフレ！？！？」
霊幻はしばし考える。
（セフレならモブも芹沢もその他も彼女作れるし……このまま付き合えって言われ続けるよりは……）
「わ、分かった。セフレになろう！」
「良かった」
ほっとしたように茂夫が肩の力を抜く。
「じゃあ師匠、セフレの儀式をしますね！」
「セフレの儀式って何！？！？」
ぐいぐいと若人に押されるまま相談所の扉を開けると、そこは教会だった。
「はぁ！？！？」
祭壇には統一郎が神父のコスプレをして立っている。
「いやっ何これ……ってお前らいつの間に着替えたの！？！？」
茂夫が、エクボが、芹沢が、花沢が、律が、最上が、ヨシフが、将が白いタキシードを着て花束を持っている。
「師匠も着替えましょう」

茂夫が手をかざすと霊幻の服が白いタキシードに変わる。
「どうせならウェディングドレス着て欲しいなあ」
芹沢が手をかざすとウェディングドレスに変わる。
「ここは白無垢だろう」
最上が手をかざすと、白無垢に変わった。
「〰〰〰っ、衣装ぐらい決めとけ！！！！」
霊幻が叫ぶと、茂夫たちがくすくすと笑った。
「では、セフレの儀を始める」
結局白タキシードになった霊幻が教会の入り口でぜぃぜぃ言っている。
「えー、新郎、影山茂夫、エクボ、芹沢克也、花沢輝気、影山律、最上啓示、ヨシフ、鈴木将は、霊幻新隆をセフレとし、病める時も健やかなる時も、悲しみの時も喜びの時も、貧しい時も富める時も、これを愛し、これを助け、これを慰め、これを敬い、その命のある限り心を尽くす事を誓いますか？」
「「「「「「「「はい、誓います」」」」」」」」
「いや新郎って言っちゃってるし！！！！」
「えーでは新婦霊幻新隆、」
「お前ら親子本当に話聞かねぇな！？」
「あなたは影山茂夫、エクボ、芹沢克也、花沢輝気、影山律、最上啓示、ヨシフ、鈴木将をセフレとし、病める時も健やかなる時も、悲しみの時も喜びの時も、貧しい時も富める時も、これを愛し、これを助け、これを慰め、これを敬い、その命のある限り心を尽くす事を誓いますか？」
やれやれ、と霊幻は苦笑しながらため息をつく。
「……はい、誓います」
わっと茂夫たちが喜びにわき上がった。
「では、誓いのキスを」
茂夫は霊幻の右頬に、エクボは額に、芹沢は左の頬に、花沢は瞼に、律は首筋に、最上は左手の指先に、ヨシフは右手の甲に、将は唇にキスを落とした。
霊幻はそれぞれ同じ場所にキスを返した。
「……じゃあ師匠、今日の夜なんですけど！！誰と初夜します

か！？！？」
「結局そう言う話かよ！！！！」
霊幻は呆れた後、あはははと大声で笑い出した。
つられて他のメンバーも笑い出す。

「じゃあ、平等に交代制で……３日に１回は休ませろよ。複数人は無しな」

霊幻が手帳に書き始めた夜のシフト表を、皆はふんふんと覗き込んでいた。

続